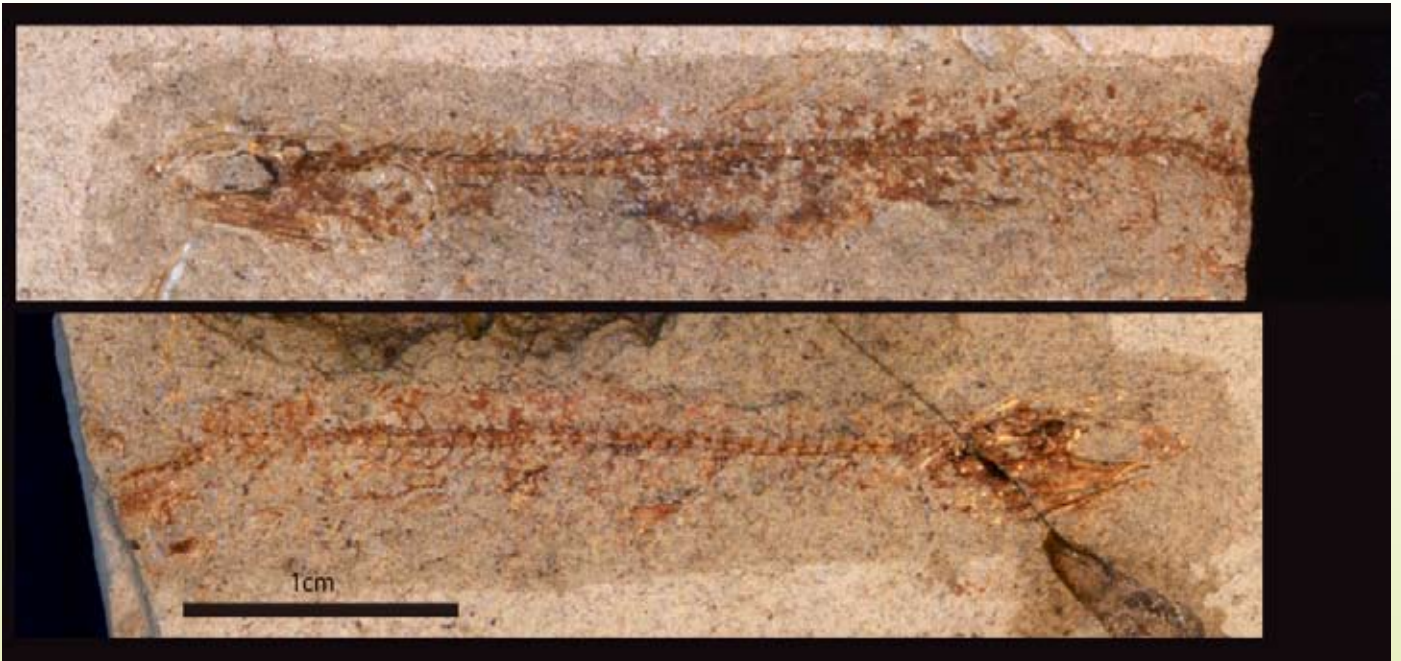


# カタクチイワシの化石

横山謙二・宮澤市郎



庵原層群岩淵層から発見されたカタクチイワシの化石

会報「自然史しずおか」31号P9で報告したコノシロ亜科の魚類化石が発見された同じ地層の富士市南松野周辺に分布する約60万年前に堆積した地層からカタクチイワシのものと思われる魚類化石が発見されました。この化石の状態は、尾部がかけているものの、頭部や体部の保存状態が良く、脊椎もかけることなく保存されています。この化石の写真を見てもわかるように、眼孔が大きく、上顎が突き出て長いのに対し、下顎は細くてあまり目立ちません。このかたよった顎の特徴が、カタクチイワシの名の由来になっているようです。

現在のカタクチイワシ科の魚類は、13属139種が知られ世界中の海から淡水域に広く分布し、非常に多様性に富む魚類です。また、世界的にも古くから食されていたようで、カタクチイワシを塩漬にし発酵させた「アンチョビー」は、ギリシャ時代にはすでに原型のようなものが作られていたとされています。また、日本では、縄文時代から食べられていたようで、土浦市上高津貝塚でカタクチイワシの耳石が見つかっています。このように、世界的に見ても、身近な食材として親しまれているカタクチイワシですが、その化石の産出数は世界的に見ても極めて少なく、同じニシン目のニシン科魚類の化石が100種以上も報告されているのに対し、カタクチイワシ科化石の報告は7例しかなく、その中で全身骨格で産出しているのはわずか3例しかありません。またニシン科の化石は、最古のもので古第三紀暁新世（約6,550万年前～5,580万年前）であるのに対し、カタクチイワシ科の化石は地中海キプロス島で発見された後期中新世（約500万年前）のものが最も古いとされています。このことから、カタクチイワシ科の起源はニシン科よりも新しいと考える研究者もいますが、アメリカ自然史博物館のグランデ氏とネルソン氏は、カタクチイワシ科化石の産出の少ない原因はその生息環境にあるとし、その起源もニシン科と同じぐらいであると考えています。これまでカタクチイワシ科の化石で、全身骨格の良い保存状態で発見されたものは、強い流れや波浪の影響の少ない浅い内湾や湖などで堆積した地層から発見されています。ここで報告するカタクチイワシの化石も、汽水・海水湖に堆積した地層から発見されたものです。カタクチイワシ科の魚類は、通常、波浪の影響の強い環境下に生息する種が多いのですが、このような高エネルギー環境下では、骨が微細で軟弱なカタクチイワシ科のような魚類は化石になりにくいのでしょうか。また、中新世以前の汽水・海水湖の地層が、世界的にも少ないのも、産出数の少ない一つの要因になっているのかもしれませんが。

このカタクチイワシ化石が発見された庵原層群岩淵層からは、まだ種類がわかっていない魚類化石が複数見つかっています。また、新たな発見がありましたら、ここで報告したいと思います。なお、この化石の詳細は当NPOの研究報告「東海自然誌」6号にて報告する予定です。